2024 年歴教協東京大会～大会テーマ：地域に根ざし、平和・人権・命をつなぐ～

暑い東京で、熱い報告と討議、笑顔と元気のあふれる大会報告

●明治大学和泉キャンパスに集う

歴史教育者協議会第 75 回全国大会は、2024 年8月3日(土)～4日(日)に東京都杉並区の明治大学和泉キャンパスで開催されました。

コロナ禍をはさんで、全国大会開催にあたって「中止」「オンライン」「対面」「ハイブリッド（対面＋オンライン）」と開催方法が模索されましたが、今年は「ハイブリット大会」として実施し、40人のオンライン参加者も含め、469名の全国からの参加者、ほかに高校生7名や加藤ゼミの皆さん、集いや現地見学の講師、スタッフの方々を含め全体の参加者は約 500 人でした。

体調不良などで急遽オンライン参加に切り替え、大会参加が可能になった方もおり、オンライン併用の意義を感じます。巷では、オンラインの研究会が増え、暑い中わざわざ旅行カバンを抱え、重たい報告資料を持参して「会場」に行って、長い時間報告を聞いたり議論したりと、そういう参加の仕方は不効率、というような傾向はあるのかも知れません。

でも！汗をふきふき会場の受付に続々と歩いてくる参加者の姿、既知のお仲間、はじめて拝見する若い参加者、「ごくろうさまです、暑かったですね」「どちらからですか」「〇〇県の〇〇です」と、顔と顔をあわせて言葉を交わし合うというその瞬間、やはり「対面大会がいいよなあ」と実感します。

一方オンラインの準備も大変です。今年は神奈川県歴教協のユースサロンのスタッフが、裏方に徹してくださり、スムーズな運営になりました。全国の参加者の声を大切に、少しでも参加できる時間があるならと、オンラインを申し込んでくださる方のために、オンラインと対面併用実務も、一部スタッフに依存せずすすめられるようにならないと、とちょっと反省も残ります。

以下、大会参加者の感想をもとに、2024 年東京大会を振り返りたいと思います。

●若い世代の参加が目立った大会

ベテラン参加者の比率が高い一方で、学生・院生や 20 代・30 代の若手教員の参加が目立ったのも、東京大会の特色です。参加者の感想からは、若い世代がベテランの実践に感銘を受けるだけではなく、ベテランたちが若い世代をともに学び合う大切な仲間として温かく迎えたことがうかがえます。

◇実際の教員の方々のお話を聞いてどのように教育を考えてきたのか授業実践を行ってきたのかとてもためになるお話を伺うことが出来て参加して良かったと思いました。学生である自分にも発言の機会を与えて下さり本当にありがとうございました。（20 代・学生）

◇話しやすい、フレンドリーながらも真剣な空間づくり、とても参加しやすかった。（20 代・院生）

◇意見の発信・交換がしやすいように場を整えてくださっていました。（20代・学生）

◇全体討議の際の小グループでの討議では教員の方々のお話から現場でどのようなことが問題になっているのか知ることができ、参考になりました。特に「民衆の歴史を教えることが主権者意識の育

成にもつながる」という言葉に感銘を受けました。私の拙い発言も温かく受け止めてくださり感謝に堪えません。2 日間を通して教員になったときどんなことを大切にしたいか、どんな授業を作りたいかが大会参加以前よりも明確になったように感じています。貴重な学びの機会をありがとうございました。（20 代・学生）

◇今回、初めての現地参加でのレポート報告で右も左も分からない状態であったが、世話人の先生方が温かく聞いて下さり、的確にアドバイスをしてくださったおかげで、リラックスした状態で報告することができた。（20 代・埼玉）

◇子どもたちが進んで学習しているお話を聞くことができ、大いに励みになり、自信につながりました。自分が抱えている思いを少し相談することもでき、とてもよい 2 日間になりました。（20 代、栃木）

●記念講演「日韓のモヤモヤから出会った新たな世界」

―加藤圭木（一橋大学）ゼミ

全体会記念講演「日韓のモヤモヤから出会った新たな世界」は、一橋大学加藤圭木ゼミの学部生・院生・卒業生が登壇し、3 冊の本を出版した思いや経緯、高校時代までに自身の受けてきた歴史教育について、パネルディスカッション形式で語りました。

◇学生・院生・卒業生主体で、本人たちが学び/つながり/次のステップに進んでいくプロセスが率直に語られていたことが非常に良かったです。特に、これを全体会のシンポとして設定されたことが画期的で、今日の話を通して私たちが今後若い人たちの思いや声に丁寧に向き合っていく必要性があることをあらためて痛感しました。（40 代・沖縄）

◇それぞれが感じていた「モヤモヤ」＝「問い」にあたるものから、まずは自分たちでしっかり考えようとされていた姿を見て、「社会をつくる一員としての自覚」がみえる姿であると感じました。私自身、小学校で教員をしながらどれぐらい慰安婦問題などと向き合って子どもたちと考えてこられたかを見直すきっかけになりました。（30 代・福岡）

◇加藤ゼミのみなさんがどういう歴史教育を受けてきたかというあたりの話がやはり大きな課題だと思いながら聞きました。近代史、そして今に直接関わる現代史をじっくり学ばせないと、社会への関心は薄れていきますし、投票もしなくなります。日本の教育に民主主義が足りないといった話にもうなずきました。（50 代・島根）

◇日韓の歴史問題にあまり興味のなかった学生たちが問題意識を持つようになったことがすごいと感じました。また「交流万能」論への違和感を抱いていたという指摘にはハッとさせられました。私も加藤ゼミのようにはいかないと思いますが、少しでも生徒たちにモヤモヤを持たせていきたいです。（40 代・京都）

●山田朗歴史教育者協議会委員長（明治大学）の「基調提案」

全体会では山田朗委員長の基調提案「地域に根ざし、平和・人権・命をつなぐ」も、多くの参加

者に感銘を与えました。
◇戦車が日本では特車、中距離弾道ミサイルは島嶼防衛用高速滑空弾などと実態をわからなくさせる名称を使って、戦争準備を見えなくさせるやり方。言葉の使いようでごまかす手法に騙されない国民にならないと、戦争を防げないと思いました。それぞれの地域に戻り、人権を守れる人を育てていきたい。（60 代・静岡）
◇ウクライナやガザ地区などの問題が解決しないなか、これらの問題を解決するために考えていくことの基本は人権・民主主義だと思いました。政府による言葉のすり替えによるごまかしの話も共感できました。（50 代・滋賀）
◇戦後約 80 年間のなかでの地域史の掘り起こしが果たした意義の大きさを改めて実感した(＝戦後史と向き合う必要性)。これからの「戦後」を考えたとき教員は「歴史を伝える立場」でもあり「歴史をつくる立場」でもあるという言葉が心に刺さった。（30 代・東京）

●多彩なテーマの「地域に学ぶ集い」

地域に学ぶ集いは関東 3 都県企画の 4 講座とともに、歴教協本部が 6 講座を企画しました。

1．昭和天皇の戦中・戦後を最新資料で検証する

◇昭和天皇が如何に戦争の遂行に深く関わっていたのかが、周辺の人物の日記で明確になったと思いました。今後も新たな史料が出て来る可能性もあるとのこと、今後も研究が深まることを期待したいと思います。（60 代・福島）

2．ぼくと歩いて考える新宿・柏木

◇これまで、何となく東京で社会主義者が活動していたというイメージでしたが、当時の東京の状況、具体的にどこでどのようにというのを学ぶと、そこで活動していた人たちの存在を実感することができました。この実感があるのとないのとでは、授業での取り上げ方に違いが出てくると思います。それぞれの地域で、地域の掘り起こしを行い、それを学び合う歴教協の醍醐味を感じられる地域の集いでした。（40 代・和歌山）

3、房総半島先端部の地震隆起と戦跡・平和交流を学ぶ

◇太平洋を上にした地図で、房総半島が突き出していて、そこが戦争の拠点になり、他国との交流の場となったなど、興味深いお話でした。（50 代・京都）

4．関東大震災と千葉県―船橋・習志野から考える朝鮮人虐殺

◇資料が豊富で、教材になりそうなものが多くあったことが一番の収穫でした。また、新版の『いわれなく殺された人々』の準備が進んでいることを知れたのも大きいです。ディスカッションの時間が多くあったのがよかったです。教材研究の時間に充てられたみたいでした。ありがとうございました。（50 代・千葉）

5．私たちのモヤモヤ、みなさんのモヤモヤ―加藤ゼミの学部生・院生との交流とディスカッション

◇モヤモヤを無理に解決しようと思うとどこかで衝突が起こるので、モヤモヤはある程度残したままでもよいのかもしれません。（40 代・三重）

◇モヤモヤと向き合うための人権を軸とした教育、という言葉に深く首肯しました。全体会のほうで、最近の数年ではモヤモヤすることすら珍しくなっているという指摘もありましたが、中高の歴史教育の現場では、そもそもモヤモヤできるだけの種、を生徒たちに蒔くことがまず求められているのだろうと思います。（20 代・東京）

6．歴史家・歴史教育家高橋礒一と砂川闘争

◇高橋礒一さんの現代史を見る目は、概念やマクロ的なくくり方でなく、ミクロ的に一人一人、今を生きている民衆一人一人といってもよい存在としてとらえている。また現代史として目の前のできごとや社会を見ている。砂川闘争の記述から見えてきました。高橋さんの仕事は、過去のものでなく、現代にも生きていることを実感。（60 代・大阪）

7．絵本で平和を語る

◇たくさんの絵本の紹介をしていただき、勉強になりました。絵本を使った平和教育に挑戦したいと思っていたので、とても良い機会に恵まれました。絵本の３つのシーンからストーリーを想像する実践、とても面白かったです。絵本の余白を読み取る、絵のタッチや色から想像力を駆使することができるという特性は、授業に生かせるなと思いました。これを機に、絵本を使った実践を考えてみようと思います。（20 代・神奈川）

8．教科書問題

◇中学校教科書（歴史・公民）の内容を報告した糀谷さんは、「危ない教科書」以外が採択されたから終わりではなく、教科書会社と教員での協議等、その後も教科書の問題に取り組まないといけないと提起していました。重要な提起と思います。（茨城・50代）

10．日韓交流

◇朴範義さん、また会場に来ていた韓国の教育関係者の丁寧なお話で韓国の教育課程の変更点など、とてもよく知ることができました。日本の歴史教育でも、今後ますます多様な視点や立場から物事を考察する機会が増えていくと思います。そうした意味でも、韓国の教科書では、どのような叙述がなされるのかを知ることはとても大切なことだと思いました。（40 代・千葉）

11．日中授業交流

◇中国の歴史教育の実践を聞くことができ、大変貴重な機会となりました。私自身、大学で中国文化論教室に所属しながら教職課程を履修していることもあり、この集いに参加したことで中国の歴史教育に一層興味が高まりました。また文学作品を使った実践を日本の社会科教育に生かせないか考える良い機会ともなりました。ありがとうございました。（20 代・学生）

●報告者の熱量を感じる分科会

全国各地から、学校づくり、授業実践、地域運動、歴史研究など、毎回多くの報告が行われ、参加者みんなで議論をする「分科会」。官制研修などのように「助言」をのたまう指導的立場の人はいません。10 代、20 代から 50, 60 代、そして 80 代までと、幅広い世代や立場の参加者が、対等に議論しあい、学び合う、「大会の醍醐味ここにあり」です。

今年はレポート数が揃わず大学分科会が開催されませんでしたが、19の分科会で146本のレポート報告がありました。以前の大会では参加した分科会以外のレポートを手にするのは、ちょっと大変でしたが、オンライン併用開催になったことで、参加者は一定期間全分科会のレポートをクラウドから入手できるようになりました。これは大変好評です。以下、すべての分科会を網羅することはできませんが、分科会の雰囲気が伝わる感想を紹介いたします。

1.地域の掘りおこし分科会

◇関東大震災時の朝鮮人等虐殺や、戦時における外国人抑留など、「他者」とどう接すべきか、理解すべきかについて考えるところが多々あった。（40代・三重）

2.日本前近代分科会

◇総括討論で、「探究」疲れの話になり、やらされている問いではなく、生徒から自然と出てくる問いが大事で、その問いを引き出すために、呼び水として教員から発問をして、教員も想定しない問いがだされることで、カオスに逢着すること、それが大事で、その過程やカオスになる部分、教員の悩む部分を実践記録でも出していこう、というのに本当に共感しました。（30代、千葉）

3.日本近現代分科会

◇「戦争の時代をどう教えてきたのか」「『平和』といわれた戦後の時代をどうとらえなおすか」という二つのテーマの立て方もよく考えられていて、それぞれの内容も興味深かったです。体験者がいなくなる戦後 80 年を迎えるにあたって、どのように「戦争」を捉え、次の世代に「戦争の記憶」をどう伝えたらよいのかという問いにたくさんのヒントをいただきました。（60代・千葉）

4.世界分科会

「歴史総合」が始まり、以前に比べて授業づくりの切り口が、地理や政治経済、更に理科など「世界史」の各単元を離れた切り口、問題視点に移ってきたように思いました。以前は、被抑圧者側からの視点や民衆からみた〇〇〇など昔の教科書の記述をひっくり返すような視点や問題提起が多かったように思う。（60代・東京）

5.憲法と現代分科会

◇トランスジェンダーの理解のため、「利き手じゃない方で書いてみる」という実践にとても興味を覚えました。実感を体験させる、とてもユニークな手法だと感じました。（60代・東京）

7.現代の課題と教育分科会

◇アイヌ民族について、実際にアイヌにルーツを持つ子どもが多い学校の実践事例やアイヌにルーツを持つ保護者や子どもの意識や考えが聞けて良かったです。また、高校の歴史教科書のアイヌについての記述の分析は、今まであまり意識していなかったことに気づかされました。（50代・滋賀）

8.平和教育分科会

◇各発表者の教育に対する熱意が感じられる内容でした。初めて知ることや新たな発見をするきっかけになることも多く、大変勉強になりました。「平和教育」と言っても、さまざまな切り口があり、純粋に戦争などに関する教材を活用するだけでなく、生徒の資質や考え方を高めたりすることも大切になってくるんだなと思いました。「平和教育は戦争に関することだけでなく平和のための活動を学ぶことも大切だ」という言葉が特に印象に残っています。「戦後責任」という言葉も挙がりましたが、今後ど

うしていくのかを、過去から学び、考え、行動し続けることが平和教育において大切だと思いました。（20 代・学生）

9.幼年・小学校低学年分科会

◇朝鮮学校の実践や、朝鮮の絵本や秋探しなどたくさんの学びがありました。じっくり話し合うことができました。この分科会の良さだと思います。（60代・千葉）

10.小学校 3 年・4 年分科会

◇さまざまなレポートについて柱に沿って話し合いができました。中学年ということで、地域に出かけたり人と出会ったりと様々な方法での学習を各地の実践から学ぶことができました。参加者が多く、議論が深まったと思います。大変勉強になりました。（40 代・千葉）

11.小学校 5 年分科会

◇小5の教育実習でうまくいかなかったこともあり、授業のあり方などを学びたかった。小5の授業のあり方、手法などを知ることができた。授業を組み立てる難しさを感じたが、それを楽しめる、楽しむということも重要だなと思わされた。（20代・学生）

12.小学校 6 年分科会

◇戦争の加害について扱う実践で、なぜ善良な人が人を殺すことに至るのか？資料に基づいて歴史的な背景から考えさせる授業について学べた。資料の精選が限られた時間の中で子どもたちに十分考えさせるのに必要なこともよくわかった。（30 代・埼玉）

13.地域の中の子どもたち

◇教員、学生、学童、フリースクールなどいろいろな立場の人が集まって、それぞれの活動の中から“地域の中で子どもをどう育てるとよいのか”という視点で子どもたちの現状と今後どのようにしていくのかを話し合うことができた。（60 代・岐阜）

14.中学校・地理と分野を超えた分散会

◇分科会名のとおりで、地理的分野から派生する様々な課題や授業方法・内容を学べた非常に有意義な分散会でした。特に報告者の方々からは「これを教えたい、伝えたい」という熱い思いを感じることができました。これは現場の教員にとって最も大切な視点だと改めて確認することもでき、この分科会に参加できてよかったと思います。（60 代・東京）

14.中学校・公民分散会

◇水俣に関する実践は、住民の目線に立った資料や取り組みが随所にあり、自分の実践に取り入れようと思いました。授業の中に討論をいれ、生徒たちに自分の意見を持たせること、また教員が提示する資料ひとつで生徒の感じ方が変わると言うことが印象的でした。（20 代・奈良）

17.障がい児教育

◇まだ学生の立場ですが、今回参加させてもらい、参加しなければ聞けなかったお話を多く聞けました。特に特別支援に関することでは、体験的な知識や実体験を聞くことができたので、今後役立てていければと思いました。（20 代・学生）

18.父母市民の歴史学習

◇この分科会は歴教協がいかに地域の中で歴史問題などについて地域の人々とつながって運動を展開しているのかを知る良い場であり、自分が関わっている地域運動への教訓と経験と学びとなります。（70 代・長野）

19.社会科の学力と教育課程

◇子どもたちとの接点から考えていくこと、地域とのつながりから考えていくことの重要性を改めて感じました。また、手間や時間はかかりますが、子どもたちとの丁寧なやりとり・往還はやはり大切だと感じました。（50 代・愛知）

20.授業方法

◇異なる目標、方法論に基づいた実践報告を集中して聞いて議論できる機会はあまり経験したことがなかったので非常に新鮮で刺激的でした。分散討議では、まとまり切らない疑問・感想や、違う背景を持つ者同士の共有が可能だったので、ありがたい仕組みでした。（20 代・東京）

●世代を超えて研究と実践をつなぐ歴教協のおもしろさ

参加者の感想から、本当に充実した時間を過ごしてもらえた大会だったと、準備に奔走し忙しい思いをしてきた運営陣も、安心し、またうれしいご褒美をいただいた気持ちになります。

２日目 16 時に閉会集会を終え、帰路につく参加者の姿も、受付の時の汗だくの様とはちがい、冷房完備の安心施設での二日間で、すっかり元気になって、笑顔で資料をつめこんだカバンをコロコロ引きながら、会場を後にしました。

実は、歴教協の山場はこの後だったという参加者も多いでしょう。「現地見学」です。今年は旅行社を入れず泊をともなうコースは実施しませんでしたが、4 つのコースを実施しました。

A、ビキニ事件　都立第五福竜丸展示館見学

B、歩いて考える新宿・柏木

C、明治大学平和教育登戸研究所資料館が問いかける戦争

D、砂川闘争を歩く

いつも歩いている、通っている場所かもしれません。しかし、歴教協が蓄積してきた研究や掘り起こしの成果を、説明してもらいながら、実際に歩くこの現地見学は、毎年参加者から好評を得ています。今年も満足していただけたのではないでしょうか。

地域に根ざした教育を根幹にしてきた歴教協の「研究や教育」を、自分の足下でも実践してみたい、そのヒントだけでも、校区や地元にもどり自分で歩いて探したい、そういう思いをもってもらえたらうれしいです。私たち歴教協の会員が、次世代につなぎたいバトンです。

来年、2025 年の歴史教育者協議会第76回全国大会も、今年と同じ会場「明治大学和泉キャンパス」です。今年参加したみなさんも、参加できなかったみなさんも、ちょっと難しいかと二の足を踏んでいた方も、ぜひ、来年は「明治大学和泉キャンパス」でお会いしましょう！京王電鉄「明大前駅」徒歩 5 分です！